丹波育児院

～辻原光治とその周辺の人々～

第13回

芦田謙造

前田英吉が北海道へ去り、明田吉五郎も須知を離れ、明田重次郎が園部へ移り住んだ後、丹波教会須知部を最後まで守ったのは、芦田謙造（一八四七～一九一五）でした。今回は、医者としても人望厚かった芦田謙造について見ていきます。

謙造は弘化三年、胡麻村（南丹市日吉町）の医を家業とする芦田家で父喜楽、母かずの間に生れました。

先祖は「丹波黒井の城主赤井悪右衛門の令弟にて黒井城滅亡し一家離散し諸所に浮浪するに至りて船井郡胡麻郷に住し医を開業」したと伝わります（『現代船井郡人物史』）。黒井城は丹波市春日町にあった山城で、天正七年（一五七九）に明智光秀の丹波攻めによって落城しています。謙造は、胡麻に移り住んだ初代から数えて九代目といわれます。

丁稚奉公から医者に

謙造四歳のとき母が大病に罹り、家計が窮迫します。生活困難となり、十一歳で商家に丁稚奉公に出ました。六年間「具（つぶさ）に辛酸を嘗（な）め」（同上書）、十九歳のとき井上半介の勧めにより南広瀬（南丹市八木町）の石川氏の門に入りました。

井上半介（堰水（えんすい）一八四二～一九一〇）は、船枝（八木町）出身の教育者で、近代教育の黎明期を担った人物として全国的にも高名です。丹波教会の設立者の一人で、留岡幸助が丹波の「追慕して止まない」三先輩として前田英吉・波多野鶴吉と共に井上を挙げていたことは第10回で触れました。

謙造は石川門下で五年間、さらに京都へ出て藤田医師について三年間苦学して医学を修め、二五歳で豊田村（京丹波町）に開業しました。

結婚・帰郷、キリスト教

豊田での開業は短期間でした。翌年には木戸ていと結婚、郷里の胡麻へ帰って父祖の業を継ぎます。

ていは、木戸豊吉（一八六二～一九二七）の姉です。木戸豊吉は、胡麻郷村長、府議・府会議長を歴任し、衆議院議員となって山陰線開通などに尽力した人物です。

明治十五年、村上太五平が芦田宅へ来て胡麻へのキリスト教伝道が始まります。翌年には同志社学生新原俊秀（一八五九～一九三八）の伝道があり、芦田は新原によって「翻然（ほんぜん）道を悟って」（同上書）信仰に入りました。

洗礼を受けたのは、丹波教会設立の十七年六月、船枝村でゴードン宣教師からでした。井上らと共に四人の執事に選任され、設立者の一人となりました。

このときには二三人が受洗していますが、そのうち十三人が胡麻の住民で、その中には後に「丹波ヨブ」と称される野林格蔵の姿もありました。芦田の父、母、妻も間もなく受洗し、二十年までに胡麻の信徒は二三人に達しています。

胡麻会堂放火と再建

芦田は十七年三月から自宅隣の一軒家を信徒の集会所に寄付していましたが、同年九月九日の夜、何者かによって放火され全焼してしまいます。キリスト教に反発した仏教徒の仕業とみる向きもありましたが、真犯人は分かりませんでした。

翌日、焼跡の灰掻きに集まった信徒のなかには余りのことゆえ犯人を告訴しようという者もありましたが、「他の者は異口同音にそれを押し留め『それゃいかん。聖書には汝の敵を愛し、汝を詛（のろ）う者を良くし、迫害（せむ）る者のために祈れとあるから、これより仇（あだ）のために祈ろうではないか』と、その場に坐って熱烈な祈祷会を開」きました（『開拓者と使徒たち』）。一カ月後、新会堂は再建されました。

須知の町医者として

明治二十年、芦田家は前田英吉の誘いを受けて須知へ転居します。当時の須知は、かつての宿場町としての繁栄は失われつつありましたが、明治三四年時点でも「戸数七百十余戸、人口三千四百を算し、商業盛んなる一小都市」（『丹波地方に於ける基督教の受容』②）でした。

須知での芦田医院は「非常に繁栄し、医師としての令名は辺り一円に拡が」りました（『開拓者と使徒たち』）。貧しい者からは強いて薬代を取らず、他の医者があまり好まないような病人宅へも気軽に往診に出たので、特に社会的に下層の人々から慕われました。四女すゑは、父は馬に乗って往診していたと伝えています。

芦田は青年のころは酒を嗜（たしな）み、しばしば溺れることもありましたが、信仰に入るとともに断酒しました。前田英吉や明田兄弟らと共に矯風会を結成して禁酒に取り組んだことはすでに述べました。

妻ていと共に自宅を開放し、牧師や伝道師、一般信徒の交わりの場としました。福知山まで伝道に出かけたこともありました。子どもたちも皆信仰に導きました。

須知部を守り抜いた芦田は、大正四年（一九一五）、六八歳で没しました。

芦田医院は長男耕平が継ぎました。耕平は大阪医術専門学校を出て神戸で開業して成功しますが、明治四一年に朝鮮へ渡り京城（ソウル）から大連（満州）を転々としていました。

謙造はちょうどその頃に大病をしたらしく、同年三月に「全快感謝金」十円を教会に寄付しています。

四年後の大正元年、父の病気のため耕平は須知へ帰り、家業を継ぎました。

謙造亡き後の大正七年一月の教会記録によると、「須知部は会員他に転じ逐次減少し、会堂頽廃す。建物売却し他日再建の資に充つ」ことになりましたが、戦後、芦田の孫一雄らによって別の場所に再建されました。

ちなみに、丹波ひかり小学校（平成十二年開校）の校歌の作詞作曲者・芦田信美氏は、謙造のひ孫です。

芦田こと子と辻原光治

芦田謙造と辻原光治の関係で気になるのは、「芦田こと子」の存在です。

こと子（琴子）については、「明治二三年一二月二五日、水呑村辻原佐太郎氏芦田こと子と結婚式を挙ぐ」、「明治三二年十月二五日、辻原琴子洛陽教会へ転出」（『丹波基督教会史』）としか分かっていませんが、辻原佐太郎は辻原清之亟の長男で、光治の兄（実兄？）ですから、こと子は光治にとって義姉になります。佐太郎は明治三三年三二歳で早逝し、こと子のその後は不詳です。

芦田姓は丹波に広く分布していますが、近隣でキリスト教徒となれば胡麻の芦田氏との関係を想像したくなります。もし姻戚関係にでもあったのなら、芦田と辻原は私的にも近しい間柄だったことになるのですが。

（山下幾雄）

現在の丹波新生教会須知会堂(須知本町)